Japan Society of Obstetrics and Gynecology

生涯研修プログラム（5）　クリニカルカンファレンス（3）
産婦人科と感染症を考える

5）HIV垂直感染とその予防

国立病院機構仙台医療センター部長　和　田　裕　一

わが国におけるHIV感染症は依然として増加傾向にあり，若年者の性感染症が問題となっている状況を考えるとHIV感染妊娠も増加することが予想される．1990年代初期にはHIV感染妊婦に対しては妊娠中，分娩時にzidovudine(AZT)を投与し，出生児に対して予防的にAZTシロップを投与することにより母子感染率は25.5%から8.3%に減少することが確認され，その後妊婦に対してさらに選択的帝王切開術を行うことによって母子感染率は2%以下に抑制された．1990年代後半からはさらに妊婦に対しても多剤併用療法(HAART)が施されることが多くなっている．わが国においては厚労省「HIV感染妊娠の早期診断と治療および母子感染予防に関する臨床的・疫学的研究」班の調査で2005年3月まで346例のHIV感染妊婦が確認されており，帝切分娩例では母子感染率は1.3%(2/149例)で，感染妊婦への抗HIV剤の投与と帝切分娩および児への予防的AZTシロップ投与という対応によって母子感染はほとんど予防可能となっている．したがって，妊娠初期での診断が重要であり，妊婦のHIVスクリーニングを確実に行うことが予防対策として第一である．わが国における妊婦のHIVスクリーニング実施率は現在91.9%に達しているが100%実施が望まれる．また，HAARTの児への影響についてはなお不明の点も多く，今後の児の長期予後調査が必要である．

NII-Electronic Library Service